

ある春の日に少女は微笑む

埼玉県立川越高等学校 三年

塩野 貴弘

朝起きて顔を洗って学校へ。授業を受けて帰宅する。あとは少々の自学をしたら寝るだけ。そんな形骸化された日常を不満も喜びもなくなったただただ過ごしていた。

「行ってきます」

今日もまたそんな何でもない一日が始まるんだなって玄関のドアを開ける。

すると春にふさわしい心地良い風が肌を撫でてきた。そうして目の前に広がる空を見ると今日の天気はいいな、そう誰もが思うほどの快晴だった。

この空一つとっても、何気ない日常にいいことがありそうと思える。そこにひねくれた感情を持つたりしないぐらいには俺は何一つとして一般的な高校生徒と変わらないと思う。

ただ、一つ違う点があるとすれば、

「……」

玄関を出て駐輪場へと向かう際中、階段の踊り場に差し掛かるとき目の前ふと大きなマンシヨンが現れる。その造形美たるや素晴らしいもので、誰もが目を引くのではないかと思わせる。俺はそのマンシヨンを見るととても懐かしい気持ちになって胸が苦しくなるのだ。病的に。

「はっ……！ はっ……！」

息ができなくてその場でうずくまる。やり場のない焦りが自分に突如降りかかった。

「くそだな……」

ただこう思えるぐらいには見た目のわりに落ち着いていた。

「つ……」

体を起こしおぼつかない足取りで階段を降りる。それでも何でもなかったかのように自転車にまたがりこぎ始める。

病的なまでの狭心。もちろんこのことを医者に相談したことはある。そこで分かったことは、治す方法があること。それが薬によるものであること。治るならそれでもいいと思うかもしれないが、俺はそうはしなかった。

一つに、この狭心の原因が身体的ではなく心身が関係しているということだった。俺の中の記憶がそうさせているのだという。つまり俺は自己防衛のためにその記憶を、トラウマを消したのだ。それを思い出させるようなことがあると途端に狭心が始まるという原理らしい。

それが分かったとき俺は、向き合わなければならない、そのトラウマから逃げてはいけな、と思ったのだ。だが

ら俺は薬で解決することをやめた。

そこで俺はリハビリになるかもと思い、毎朝あのマンションを見ることにしたのだ。俺が症状のわりに落ち着いていた理由はここにあった。ただこの行為が果たしてリハビリになるのかと言われれば分からなかった。なんなら医者からはやめると言われた。でも俺はそれにどんな形であれ関わっていたかったのだ。

ぼーっと自転車をこぐこと二十分、学校につく。階段を上り、廊下を経て教室へ入る。入るや否や元気な声で誰かがこっちに話しかけてきた。

「おはよー！ 今日なかなかいい天気じゃ……って、なんて顔してんだよ」

話しかけてきたのは幼馴染の高森翔太だった。小学、中学とも同じ学校で高校まで同じ。なんならクラスまで同じというなかなか縁のある間柄だった。

「朝はたいいていみんなこんなもんだろ」

と吐き捨てるように言った。

「お前の場合特にひどいんだよ。まだあれ、続けてるのかよ」

翔太は俺の病気について知っている数少ないうちの一人だった。理解があるがゆえにこの行動に快く思っていないらしい。今日の顔はとりわけひどかったらしく感づかれました。

「まあな」

心配してくれるのはうれしいが、やめるという選択はないだろうなって気はしていた。

いつものごとくぶしつけに答えると、分かったよとばかりに、くるっと表情を変えて話し始めた。

「まあいいや。そんな話は置いといて……そろそろ陸上競技大会じゃん。一緒に何か競技でない？」

「別に構わないけど二人で出るような競技ってあるのか？」
部活動をしていない俺としては友達の間が狭い。ゆえにグループを組んでとか言われると少々困る。

そんなときに翔太がいてくれて助かることは多くある。今回も下手に知らないやつと組んで気まぐくなるよりかはその方がよかった。

「一緒になって別に二人限定ってわけじゃないと思うけど……そうだなー二人三脚ー！」

「じゃあそれゆづら」

「オッケー。後で紙が来たら書いてくんな」

「ああ」

なんてとりとめもない会話をしていると朝のホームルームの時間になる。

ホームルームで話すことなんて正直大したことはなく聞き流していたが、さっきまで話していた陸上競技大会の話になったので少し耳を傾けた。

「一週間後に行われる陸上競技大会の件ですが……」

こう話しているのは俺のクラスの学級委員長を務める神崎汐里だ。

容姿端麗で勉強もでき、運動もできるとなかなかハイスペック持ちだった。ただそれだけあって近づきづらい高嶺の花感があるのか、浮いた話はあまり聞いたことがなかった。

「個人競技は以下の通りで、クラス単位の競技は例年通りクラス全員リレーと大縄跳びに決まりました。把握お願いします。それで、リレーに出る人ですが……」

自分には関係ないなと話をぼーっと聞き流していたらいつの間にかホームルームが終わっていた。

「起立。気を付け。礼。ありがとうございました」

ガタガタと音を立て椅子をしまい、各々一時間目の準備を始める。

二年生の教室は新校舎で廊下に出ると外がよく見えるところに立っていて、今日みたいな日は外を見たくなる。

外を見ると青空の中に一羽の鳥が飛んでいた。その姿は誰からも何からも縛られていない、そんな気がした。

普通の人にとってはなんの変哲もない一日が時の流れるままに過ぎてゆくのだろう。なら俺はどうかなのだろう。

いつからか自分だけ時が止まってしまった、そんな感覚があった。

「はい、じゃあここでできりがいいから授業終了。起立」

決まり切った日常というものはのっぺりとしていて早く時間が過ぎる気がする。気が付けば下校時間になっていて、バラバラと人が教室から出ていく。

病気の関係で部活動に入っていない俺は帰り支度をすまし、すぐに帰宅の途に入る。クラスの席が近いやつとかに軽く挨拶をして教室を出た。

外に出ると季節のせいとか四時くらいでもまだ明るかった。そんなことを思い家へと帰る。

帰り道はまたやはりハビリという名目であのマンションによる。

そして近くに来ると自転車を下り手で押した。

「何がこうさせるんだらうな」

朝一度見ているからここにきてても若干の胸の苦しみがういなもの、大した発作は起きない。p.207、

「神崎？」

そのマンションの玄関あたりに神崎汐里がマンションを見上げそこにいた。こっちは気づいてなかったが、素通りするのも何なので声をかけた。

「神崎か？」

その声をかけると驚いた様子でこちらを見てきた。それはただ驚いているというには足りないくらい大きなものであった気がした。

「声かけられただけでそこまで驚く？」

するといつものきりっとした顔に戻り会話を続けてきた。

「ごめんなさい。突然だったもので……」

驚かすつもりはなく、謝られてしまえばつが悪くなってしまう。

「謝るほびでもならいけど……」

「い、いえ。違いわ。私の今の家は神代町の少し先だから……少し友達の家で用事があった」

そう聞くと神崎は若干もったえぶりを見た。

「そうか。奇るところ邪魔して悪かったな。じゃあまた明日」

そう言って立ち去ろうとしたとき、後ろから神崎が声をかけてきた。

「……………それでは、なぜあなたはここに？」

乗りかけた自転車の手すりに力が入ったのが分かった。その瞬間、俺の中で底知れぬ緊張が走ったのを感じた。病気のことをほとんど話していない自分にとって、ここに来ることの理由を聞かれたことに若干の抵抗があった。

「帰宅路なんだよ、ここ。改めてみるとほんと大きいな」とりあえずの嘘をでっち上げ、にこやかに神崎の方へと振り返る。

俺は、特に何もない無味乾燥な感じで返してくると思っていた。でも予想とは裏腹に、振り返った先の神崎の顔は緊張していて、何かを覚悟しているように見えた。

「……………そうね。……………じゃあ、また明日」

だが、俺の言葉に安堵したのかすぐにその強張った表情をやめ、いつもの神崎に戻った。

「お、おう。また明日」

その変わり様に少し驚いたが、別れの挨拶をした。すると、神崎は一つお辞儀をしてマンシヨンの中へと入って行った。その後ろ姿を見た瞬間だった。

「……っ！」

狭心に襲われた。

苦しい中俺は、神崎がマンシヨンの中に入って行くのを見ていた。苦しんでいるところを神崎に見せたくなかった。

「……」

神崎が完全に視界から消えたのを確認して、俺はその場にへたり込んだ。

「何故……？」

この場所というマジックが狭心を起こした、というのはあるだろう。でも今のはそれだけが原因じゃないことは明白だった。

神崎汐里

彼女がこの原因を引き起こしているのだろうか。

でも、正直言ってその考えはあまりに飛躍しすぎていた。

知り合ったのなんかこのクラス替えで初めてで、それほど親しい仲というわけでもない。そんな人が長年付き合っ

てきたこの病気と関係があるというのはやはり、どう考えても、無理がある理論だった。

だったらこの気持ちをさっさと払うために、急いで神崎を呼び止めて、昔俺たち会ったことあるか？　なんて訳の分からないことを一言聞いてみればいい。

でも、立ち上がり歩き出した俺の足は自転車に向けられていた。

その理由は単純だった。

勇気がない。

「関係なくて変人扱いされるのは嫌だしな……」

他意なんかない。

そう自分に言い聞かせて俺は家へと帰って行った。

その後というものその道で帰ることに変わりがなかったが、そのマンシヨンに神崎が現れることはなかった。そして月日は経ち陸上競技大会当日となった。

「えー。このたびの陸上競技大会は素晴らしい天気恵まれ……」

お決まりの校長先生の長ったらしいお言葉を聞き、俺たちの陸上競技大会はスタートした。準備運動やら選手宣誓

なんかを終え各自自分のクラスのところにいき自分たちの
競技の準備を進める。

俺もとばかりに体を動かさそうと思ったら翔太が声をかけ
てきた。

「一位取るうぜー！」

「そっだな」

「テンション低っ！ 盛り上がっていかないつつまらねえ
ぜ〜」

「安心しろ。楽しもうと思っていないから」

すると笑い呆れた顔をしてこちらを見てくる。

「ま、諒也はそういうやつだもんな。むしろそう来なく
ちやー！」

「どっという意味だそれ……」

考えるのが面倒くさくなった翔太とともに二人三脚の準
備を始めた。

「二人三脚っていつ？」

「今やっているリレーの次の次」

「つまり？」

「五十メートル走の次」

一競技大体三十分と考えて後一時間はある計算だった。

「分かった。まだ割と時間に余裕あるし練習でもしている
か」

「それがいい。行こう」

俺たちは足に紐をつけたまま開けている場所に向かい二
人三脚の練習を始めた。

練習はと言つと、割とできているというのが驚きだった。

腐れ縁なのか息が合うといった感じで踏くことはなかった。

「お。二年の徒競走始まったな。そろそろ戻るか？」

「そのほうがいいな。こんなに練習して出られなかったと
かしゃしにならない」

「そりゃそうだ。集合場所までこれで行こう」

「分かった。じゃあ、せーのっ。1、2、1、2」

無事に一度も転ばないで集合場所まで行けた。人は集まっ
ていてその場で足踏みをしたりして練習している人たちが
見受けられた。

「うちらは体力温存のためしないぞ」

「おう」

一言言葉を交わし二年の徒競走へと目を向ける。

男子が終わり女子の徒競走が始まった。周りの男子がう
るさいがそれもまた風情かなと徒競走をみる。

そして自分のクラスになり神崎が走るのかその姿が目に入った。そしてスタートのモーションに入ってその横顔を見た瞬間若干の胸の締めりを感じた。声にならない苦しみに悶える。

「ほーっ。あいつかわいいう上に頭もよくて、足まで速いかよ。俺が女子なら嫉妬しちまうな。ん？ どうした？」

翔太が俺が苦しんでいるのに気づき心配してきた。

「だ、大丈夫。せき込みそこののをこらえただけだから」

「なんだその無意味な頑張り！ 諒也体強くないんだしわけわかんないことすんなよ？」

「わ、悪く」

嘘で無駄に心配させたことに若干悪い気がしてしまっ

そんなことをしている役員が競技の説明をし始めた。

「間もなく二人三脚の一年が始まります。各自準備を始めてください。なおルールについては……」

変わっているかどうかは分からないがうちの学校の二人三脚は四百メートルを四組のペアで走るリレー形式なので始まったらほとんど時間がかからない。学年の半分で分けられていて前半組だった俺たちはあっという間に自分たちの番になった。

「練習通りやれば一位狙えるでしょ？」

「練習通り、だったらな……」

正直さっきのパフォーマンス通りいきそうにないのが現状だった。でも、自分の都合で翔太やクラスに迷惑をかけたくなかったので、自分のできる限りを尽くし走り切ろうと気合を入れた。

「第一走って緊張するな……」

「お前も緊張することあんだな」

「馬鹿にすんな」

なんて軽口をたたいていると開始のアナウンスが始まった。

「位置について……用意……！」

パンツとスターターピストルが鳴り一斉に動き始めた。

「せーのっ！ 1！ 2！ 1！ 2！」

さっきよりも声に張りが出ていて気合の違いが見て取れた。

「もう少し上げるぞっ……！」

「……おう」

腐れ縁とは怖いもので息の合い方が尋常じゃなかった。

さっきの通り動けるか心配だったがそんなのも気になら

ないほどいいペースで、四チーム中まさかの一位でバトンを渡せた。

「うっしゃー！ がんばれ！ 当摩！ 玲！」

「おう！ せーのっ！」

一走者目も好調な駆け出しでその後もミスすることなく、前半組としては一位で締めくくることが出来た。タイム的な問題で結果としては八チーム中二位だったが自分的には御の字といったところだった。

「最後の追い込みがなー。まあクラスのポイントには十分貢献できたしいいか」

「そっだな」

翔太は若干悔しがっていたものの切り替えは早く、リレーの選手だったあいつは軽く一位をもぎ取ってきた。

その後のクラス全員リレーをやり、自分が出る競技は午前中にはもうないことを確認し、素早く教室へと戻った。

クーラーの効いた教室は火照ったからだに染み渡りかなり快適だった。教室内は各自バラバラと終わった生徒たちが帰ってきていて、部活の友達なんかで集まっているのかわからないやつなんかもいて飯を食っていた。

帰ってきた翔太と共に飯を食い始めたが、俺は今日も起

きた狭心についてずっと考えていた。

午後になりクラスの順位に大きくかわるクラス単位の大形の競技が始まった。

「俺はこの後台風の目に出場するから。把握よろしく！」

「なんで翔太の出る競技を把握しなくちゃいけないんだよ」

「応援してくれよな！ じゃあ行ってくる！」

「人の話なんか聞いちゃいねえな」

翔太は元気にその場を飛び出し集合場所へと向かった。

「……疲れたな……」

俺は、ひたすら行われる競技を何のとは無しに見ていた。

まあでも、言ってしまうばそこまで思い入れのあるものでもない。そんなのも飽きるわけで知らぬ間に寝ていた。

「んっ……」

どのくらい時間がたっただろう。目を覚ました俺は時計を確認してみた。いいタイミングで起きられたらしく、二年最後の競技大縄跳びの時間になっていた。

重い腰を上げクラス集合場所へと向かった。

「はいじゃあ、集合。作戦は前に伝えた通りで！ この競技で一位取れたら優勝圏内だし頑張ろう！」

「おー！」

クラスの体育委員が皆を鼓舞する。皆もそれに応え一致団結する。周りのクラスも円陣を組んだり、まだ始まってすらないのに先生を胴上げしているところなんかもある。さすがの俺も最後の競技だしとさっきまでのやる気のなさを振り払い気合を入れた。

「頑張るか。んで、作戦ってどんなのだったっけ？」

翔太に問いかける。話を聞かない俺としては、さっき言った通りとか前に伝えたとか言われると分からないことが多い。ある。

「さすがだな……まあ、入るポイントとして連続記録と回数記録があるだろ？ そのうちの連続記録でポイントを狙おうといった作戦。制限時間切っても跳び続けてたら大丈夫らしいから、めちゃくちゃゆっくり回すらしいぜ」

両取りは無理と考えての作戦だった。

高校生の行事なんてものはえてして時間をかけてやるものではないため、結果はともかく内容はひどいものである。

大縄跳びなんてものは時間をかけて何回も練習を積み重ねていけるというのは当たり前なこと、大会前の体育の授業で一回練習したぐらいじゃできなくて普通。その穴

をどう埋めるかにおいてこの作戦はなかなかいいものだった。

「位置について、用意……」

放送の音が終わると共にせーの！ や、さんはい！ だの様々な掛け声とともに縄が回り始める。

「1！ 2！ 3……」

自分たちも周りとは比べ物にならないぐらい遅いペースで縄が回る。

周りからは策士だ！ とか、せーのーい！ とかいろいろ聞こえてくるがそんなのは気にしないで跳び続けた。

そんな折ふと前方を見た。自分は割と背は大きいほうだったので大縄の真ん中ぐらいにいる。そのため前方を見れば必然と人がいる。

そのとき神崎が目に入った。そして跳ぶ姿を見た瞬間、

「……！！」

いまだかつてない程の大きな狭心に襲われた。目の前が真っ暗になりその場に倒れた。

やってしまったな、そう心で思った時にはもう意識はなかった。

「……………保健室か？」

あたりを見渡す限り保健室という予想は当たっていた。

「あ。起きたか」

そう声をかけてきたのは保健室の清水先生だった。

こんな身であるがゆえによくお世話になっている先生の一人だった。

目を覚ましたことを伝えようと体を動かそうとしたら止めに来た。

「いいよそのまま。頭打ったかもしれない」

「すいません」

先生は俺の手当てで使った薬品たちをしまいがてらに話していた。

「いやいやびっくりしたよ。まさか大縄跳びの最中に突然倒れるとは」

「俺もまさかとは思いましたよ。あ、そういうば結果はどうなりました？」

自分のせいでその時に記録が止まってしまったのはほぼ確実だったため気になった。

「えーと。君は確か二年組だから……………大縄跳びは連続記録三位で総合としては四位だつてね」

「そりゃあ悪いことしたな……………」

自分個人の問題であるなら何位でも構わないが、みんなにかかわってくる問題であるから仕方ないとはいえ罪悪感が込み上げてくる。

「あまり気にしなくていいんじゃない？ たかだか陸上競技大会だし。ましてや病気の関係で倒れた君を責める人なんていやしないって」

「だといんですけど……………」

話している間先生は何やら色々動いていたが、終わったらしく、真ん中にあるテーブル席に座った。

「まあ、そんなことよりも本当に大事なことはあるしね」

「大事なこと？」

そう聞き返すとさっきまでの表情とは打って変わり、真剣なものとなった。

「ああ。倒れた原因のほう」

くると椅子を回し俺のほうを見てくる。

その剣幕に気圧されそうになる。

「狭心を起こした原因ってことですか？」

「そうだね」

所在なざげに座っていた椅子から立ち上がり歩き出した。

「君の病状はよく知っているし、知ってるがゆえに今日起きたことが気になっちゃって」

「……」

言いたいことは何となくわかったがそのまま先生の話を聞いていた。

「狭心が起ころのは懐かしさを感じた時。じゃあ何で大縄跳びなんて何度もやってきたのに今になってそれが起きたんだろっね」

淡々と疑問に思っていることを述べてきた。

「それは……」

返すに難しいことだった。

神崎がかかわっているかもしれないということは自分でも確認のないことだったからだ。

「何でか当ててあげようか?」

突然突拍子もないことを言ってきた。

「わ、分かるんですか?」

「誰だと思ってるのさ。私は半分君の主治医だよ?」

ふんっ、とばかりに胸をそらす。

「じゃあぶっして……」

にやりとしてこっちを見つめてくる。

「恋! だね!」

「……………」

表情で察した通りの回答が返ってきた。

「跳んでいる最中に女の子が目に入り、その姿に恋に落ちた! どうだ?」

身振り手振りを交えながら俺にそのメカニズムを語ってきた。

完全に遊んでいると分かったが、最初の部分で言えばあながち間違いいではないあたりに半分関心半分呆れの気分だった。

「だったらどれだけいいか……」

生まれてこの方恋なんてものをしたことがない自分にとってそれがどんなものなのかの検討は付かないが、少なくとも病気よりは正常だろうと思った。

「概ね目に入った生徒は神崎さんってところかな?」

ドキリとした。まさか人の名前まで正確に当てるとは思わなかった。

確かに遊んで言っていることに間違いはないが、確かな自信みたいなものが先生にある気がした。

「……ぶっして神崎だと思っただけですか?」

先生は歩いていた足を止めまた椅子に座った。

「その言い方だと思ひ当たる節があるって感じがするのは私だけかな？」

「何を先生は知って……」

そう言いかけた時先生は俺の口を人差し指で止めた。

「思ひ当たる節があるか？ 私が聞きたいのはそれだけだ」

そういうと俺の口から手を放した。

「……ないといえぱうそになります」

「まあそうなんだろうな」

先生は手持無沙汰に近くにあったコーヒーカーップのふちを指でなぞっていた。

「それを君はどつとらえている？」

「どつて……」

「行動を起して何かを変えようという気はあるのか？」

「……それは」

行動を起さず。ずっとそうしたいと思っていた。

でも何故だろう。

もちろんです。その言葉が出なかった。

「……その感じじゃあ何か行動することはないんだろ
うな」

先生はコーヒを淹れに行くために立ち上がった。

「勝手な解釈をし、それを鵜呑みにする。それまた答えの
一つだ」

先生は容量を確認するためにコーヒの入ったポットを
くるくると回した。

「なんなら誰も傷つけない良い選択かもね」

その返答は□元こそ笑っていたが本気ではない。

「ただ……」

一呼吸を置いたその素振りが証明していた。

「それは答えであつて解決にはなり得ない」

ポットから流れ出るコーヒはもう冷めているのか湯気
は見取れなかった。

その冷めたコーヒがどうしても自分に重なる気がして
ならなかった。

いつか解決するんだ。いつか真実を知るんだ。なんて□
では囁いていた。

でも、

いつかなんてやってこない。

何となく納得して、飲み込んで、を繰り返して……

リハビリなんてこのことに気づかせないが故の免罪符で

しかないこと……

それは心のどこかで分かっていた。

分からないふりをしてきただけだ。

「少々きつい言い方だったかな。でも一度君に言っておきたかったんだ」

その口調はさっきと打って変わって優しいものだった。

ぬるくなっているかと言われたので、はいと一言言って佇まいを直した。

「こうは言ったが、さっきも言った通り何もしていないのは一つの答えであることには変わりはない。だいたいこれは君の人生だ。君がそう選択するならそれは立派な解答だろう」

受け取ったコーヒーをすすり、ぼつりと俺は話し出した。

「……俺に耐えられるでしゅうか？」

事実の内容がどつこうという話ではない。それを聞いて耐えられずまた記憶喪失になりました、なんてなったら洒落にならない。単純に俺はそれが怖かった。

「ぶっ。そんなことか」

俺の心配とはよそに先生は呆れ半分嬉しさ半分な顔をしていた。

「もう君は子供じゃない。そのことを頭に入れておくだけでも十分ってなもんだよ」

にっこりとしてこっちを見てきた。

「でも、君が大人になっただけ。事実自体が変わったわけじゃない。そこだけは履き違えないでくれよ」

先生はじつとこっちを見て、俺の返事を待っていた。

「はー」

俺はそれに答えるように、確かな信念をもって返事をした。

「いい返事だ。まあ、その感じじゃ体の調子も治っただろう。時間もそれなりだし気を付けて帰れよ」

時間を見てみると予定下校時刻はとうに過ぎていて、外はもうだいぶ暗かった。

ベッドから降り帰り支度を始めた。

「本当にこんな時間までありがとっごいしました」

「別に気にしなくていいよ。生徒の面倒見るのが他の先生よりも大事な本職だから」

そう言って先生ははにかんだ。

身支度の終えた俺はそれじゃあと一言言ってお辞儀をして保健室から出た。

外に出ると春らしからぬ最近の気温が俺の体にまとわり

ついた。ただ、時折吹く風がとてますがしかかった。

逃げていたという事実の再認識はもちろん恥ずかしさがあつた。

でも、気持ちについてとても鮮明になったことでもあつた。

翌日、神崎に聞いてみようと思つたものいいタイミングが来なくて結局帰る羽目になってしまった。

今日じゃなくても、なんていう心のどこかでまだ甘さが抜けていないことがないといえは嘘になるだろうと自覚はしていた。

そんな弱気な自分に辟易しつつ帰っていると、あのマンションに差し掛かった。着くや否や目の前にボールが転がってきた。

「あ、取ってください。こっちこっち。投げてー」

そこにいたのは白いワンピースに季節外れの麦わら帽子を被った女の子だった。

俺は自転車を止め言われるがままにその子にボールを投げた。

「おー。ナイスボール。お兄さんうまいね」

おおつと思つた。年下からため口で褒められると何とも言えない気分になる。

手を振りその場を立ち去ろうとする少女が近寄ってきて話しかけてきた。

「お兄さん暇？ 暇なら私と遊んでほしいんだけど」

これまたおおつと思つた。突然の申し出に絶句してしまう。

「し、知らない高校二年生誘います？ 普通？」

至ってシンプルで理路整然とした誰も傷つけない断り方だった。

しかしその言動に全くひるむ様子はなく少女は続けた。

「暇なんでしょ？ こんな時間に帰ってきちゃうってこと

は」

ひるむどころか喧嘩を売ってきた。

言葉攻めで泣かせてやるか、なんてことをほんの一瞬考えもしたが、彼女に折れることにした。

何故だかわからない。でも、自分でも驚くぐらい煽られたことにイラついていなかった。

「ああ。暇だよ」

「やっぱね！ じゃあ最初はキャッチボール！」

「最初はって次もあるのかよ……ってうお！」

少女が突然笑いながらボールを投げてきた。ある程度の距離を取りパスと言ってきたので返した。

キャッチボールをするなんていつ以来だろうと考えて過去を振り返りそうになりやめた。しかし、やはりその記憶があるのかボールを握る感覚に覚えがあった。

「やっぱりキャッチボールは二人でやるものだよー」

「別に三人でも四人でも楽しいんじゃないの？ 経験がないから何とも言えんが」

「そうかな？ 私も経験ないな。三人以上」

距離をとっているためある程度大きな声を出して話す。

「でも多分二人でやるほうが私は楽しいと思うな」

「そうか？ まあ楽しけりゃそれでいいけどさ」

俺もなんだかんだ言って二人以上でキャッチボールするっていうのはピンとこない感じがする。

「あーなんか生意気ー」

「年上なんだから別に構わないだろ」

「何言ってるの！ 私のほうが年上だからー」

「はいはい……そうですね」

見栄を張っちゃうあたりがまだかわいいな、と思いキャッチボールをつづける。しばらくして飽きたのかボールを持つ

たままこっちにきた。

「じゃあ次はブランコー」

そう言って指をさしたのはこのタワーマンションに隣接している小さな公園にあるブランコだった。

駆け足で少女はそのブランコに乗り足早にこぎ始める。

俺はその背中を押してあげようとする。

「ダメ。お兄さんも乗るの」

「こんな小さいブランコに？」

「うん」

有無を言わさぬその言葉にしぶしぶ従わされ乗る。足がついてしまいがしばらくこいでからなぜか知らないが違和感があった。

「なんか足りない気がするな……」

ふとそんな言葉がこぼれた。別段普通の公園で普通のブランコだ。とりわけ何というわけではない。でもなぜか物足りなさを感じた。

「私もそう思うんだー」

横で元気にこぐその少女もそう言ってきた。小さくつぶやいただけなのに伝わったことに驚いた。

「あと二台くらいないと順番待ちしちゃつもんね」

「確かにな」

その二台という数に妙にじっくりくる。

ブランコの近くに建てられている少し新しい遊具を見て
そう思った。

ブランコもしばらくこいだら飽きたのか降り、次はだる
まさんが転んだをやると言ってきた。

こんなことが延々と続きだいが日が傾いたあたりに少女が、
「そろそろ帰らなきゃな—」

と言ってきた。時間にして五時ちよつと過ぎぐらゐの時
間帯だった。

「そうだな。子供は帰る時間だな」

「生意気—！ まあ遊んでくれてありがと—！ また明日
ね—」

「ああ。……って明日も遊ぶのかよ—！」
と叫んだがそこに少女はいなかった。

「早いな。もう帰ったのか……」
一抹の寂しさを覚え、自分も帰宅の途に就く。時間は五

時過ぎだったためあたりは若干の暗さがあった。

この時間に自転車をごいで帰ることはないが、ぼやけた
街灯で照らされたいつともは表情の違つこの景色に懐かし

さを感じた。だけど、発作が起きなかったことに気づかなか
った。

翌日も聞き出すチャンスがなくそのまま帰宅することにな
った。

帰っている最中にふと昨日の少女のことが思い出される。
突然高校生を誘うようななかなか勇氣のある子である。

そんな子にやすやすと乗ってしまう俺も俺だが、断りきろ
うという努力をしなかった。

いや違つ。断るといふ考えすら持っていなかった気がす
る。一度は断つてみたもののそれがダメだつてことが分かっ
たうえでの会話だつたのではないか。

そんな不思議な感覚にさいなまれながらもいつもの道だ
からとあのマンションへと向かう。そうして着いてみると
案の定そこには少女がいて俺を見かけると小走りに向かっ
てきた。

「今日は縄跳びしよう—！」

「もはや俺の用事を聞くことすらしないのな」

昨日同様この誘いが別段嫌なわけではなかった。むしろ
望んで自らやってきた気すらする。

俺は、自転車を横付けし、隣接する公園へと向かう。

「すぐさまに渡された縄跳びはもちろんのごとく小さいた
め跳ぶことはできなかった。」

「さすがに今回は無理だな」

「そっかー。ならそこに座って私が跳ぶところ見てみてよ」

「そう少女は言うとおぼつかないジャンプで前回りとびを
始めた。」

「その光景をただひたすら見るといふ謎シチュエーション
である。」

「勘違いされそうだが俺は別にロリコンではない。清水先
生にも言ったが、思えば、子供だとか大人だとか関係なく、
誰かを好きになったりしたことがなかった。女性とかかわ
りが少ないというのもあるが、さすがにこの年にもなって
そういう感情がないっていうのはどうなのだろうと思う。」

「それもまたこの病気のせいなのかとも思うが、関係がな
さすぎぬ。」

「そんなことを思っていると少女がふと跳びながら随分タ
イムリーな質問を投げかけてきた。」

「ところでお兄さんは付き合っている人とかいるの？」

「えっ……うーん……恋人か……できたことないな。作る
うと努力したことすらない」

「随分と寂しいねー」

「やかましいわ」

「なんてとりとめもないことをだらだらとしゃべっていた。」

「じゃあ逆にあなたはいるんですかね？」

「なんて子供相手に嫌な質問を投げかけた。」

「いるしー！　なんて言葉が返ってくる気がしていたが、

彼女の表情は随分と悲しいものだった。」

「私はね………いたの」

「いた？　なぜ過去形？」

「年にしてまだ小学校入りたてか入る前ぐらいなものであ
るのに、もう失恋を経験したというのだろうか。」

「うん。過去形。私があるところから離れちゃったか
ら………」

「なるほど。引っ越しかなかでってこと？」

「………まあそんな感じかなー」

「そんな感じ。少女は随分とあまいな感じに俺の質問に
答えた。」

「約束もしたんだその時に。大きくなったら結婚しよう
ねーって」

「お、あるやつな。得てして、そんなの守っている奴なん

ていないだろうけど」

そういうとまたちくりと胸が痛む。その痛みを無視して少女の言葉を聞く。

「かもね。でもその約束はもうなしだよ。契約不履行！私針干本飲まなきゃ」

少女は笑ってそう告げた。その言葉を聞いた瞬間、

キーン

何かが胸の中から切れた音がした。

それが何なのかは分からない。でもそれが自分の心の何かを結び付けていたような気がした。

「その人まだ約束守ってたらどうしよ。ちゃんと伝わってるかな？」

なぜ俺にそれを聞くのかは分からなかった。

でもちゃんと俺が答えることにした。

「ああ。たぶん。いや絶対伝わってるぞ」

やっぱりなぜ俺がこの答えをするのかは分からない。でも少女もそれに答えてくれた。

「そっかー！ なら大丈夫だね！ よーし遊びの続きをし

よう！ 次は滑り台ー！」

元気よく走り出し滑り台へと向かう背を見ながら俺もそ

れについていく。

そんなこんなでまた五時ぐらいいなり少女は帰っていった。昨日ほどではないが若干の寂しさがそこにはあった。まだ遊んでいたい、そんな気持ちになるぐらいいには。

その翌日俺は決心していた。今日こそ聞くと。

昨日何かが外れて以来、俺の中で勇気みたいなものが見ていた。気づけば、いつもの日課のマンションを見るときにおこる発作もだんだん下火になっているのを感じた。

今日がその時だ。そう心に誓い学校へと向かった。なんとも、気はそぞろで、気が付けば授業が終わっていた。慌てて、部活に向かおうとする神崎を呼び止めた。

「ちょっと待ってくれ。神崎」

そう俺が言うと前みたいに驚く。

「何か用かしら？」

平静を装い聞いてきた。それに伴い俺も緊張が走る。

「変なこと言っていると思ったらすぐに聞くのをやめてほしいんだ」

現状聞いただけの所以は清水先生の言葉の端と俺の感覚だけだ。

深読みしているだけの可能性も、直感が間違っている可能性も大いにはらんでいたため、予め釘を刺しておいた。

「……………俺たち昔どこかで……………」

そういつた瞬間神崎が俺から目をそらした。それは悲しさと驚きをたたえたような表情で、なんと声をかけたらいいのか分からなかった。すると神崎はぽつりと言った。

「っ……………ごめんなさい。いつか来るとは思っていたのだけれどいざ来ると心の準備ができなくて。明日、にしてみらえるかしら」

「お、おう。分かった」

そう告げると足早に神崎は挨拶もなしにその場から離れた。

ぽつりと残された俺は聞けなかったという心残りの念と聞かなかったという安堵の念、彼女の表情から察せられる事実に対する恐怖の念とがごちゃ混ぜになっていた。

一つ分かったことは神崎は確実に関わっているということ。

本当に記憶を失っているんだってことを実感した。

俺はとぼとぼと学校を出て自転車にまたがり帰宅した。

例に倣いそのマンションに向かう。少女はやはりいて小走りに俺の方へと向かってきた。

「今日は……………って元気くない？」

なるべくそんな顔をしないと決めていたのだが出てしまっていたらしい。

「いや。ちょっと悩み事があって。それについて考えていた」
そういうと少女は胸をそらし自慢げに言ってきた。

「ふふーん。悩み事なら私が聞いてあげようー」

「生意気だな。全く」

「年上だからいいんだもど」

「……………そうか。ならありがたく愚痴らせてもらおうわ」
病気のことから何から何まで話した。いつもはこのことを話すのにかなりの抵抗があるのだがすんなりと言えてしまった。

「また。」

「なるほどねー。まあ結局のところ自信がないんだ」

核心を突かれのけ反りそうになる。

「ザクツというな」

「ふんわりしていても解決にならないもん」

どどこかで聞いたようなことを言われる。

「でもこれ乗り越えたらすべてが解決するんじゃないっ」

「おそろくな」

確証はない。もし神崎からの話が不十分なら。それとはまったく関係のないことにこの病気が起因しているなら。解決にはいたらないだろう。

「もし越えられなかったら振出しに戻るんだらうな……」

「大丈夫。私がついているから！」

「そうか。それなら大丈夫か」

なんて乾いた笑いをする。

「本当だもん！ まあそれでまだ心配なら私がおまじないをしてあげよう！ 目をつむって」

言われるがままに目をつむる。

すると俺の額と少女の額がぶつかった。それを何秒間かやり少女の額が離れた。

「うん。これで大丈夫！ ぐっぐっ」

何とも言えない心の温かさを感じた。

「すごいよ。なんか行ける気がしてきた」

「でしょー！ よくお母さんがしてくれたんだー」

その後少女はどんな時にしてもらったとか、ほかの人にもしあげたことがあるとかいろんな話をした。

すると話が終わったくらいで、

「今日はちょっと用事があって早く帰らないといけないんだ」

と言ってきた。時間にしてまだ四時半ぐらいだったのでいつもよりは早めの帰宅となった。

「そうか。何かわからないけど頑張れよ」

「うん！ お兄さんも頑張って！」

そうして帰ろうとしたのだが、疑問に残っていたことを最後に聞いてみた。

「そういえばなんて名前なんだ？」

そう聞くと振り向いて言ってきた。

「真奈美！」

にこやかな笑顔で答え、そうしてまた振り向き走っていった。

「真奈美……」

俺はこの名前に覚えはなかった。恐らく俺の知り合いの中にはいない。

でも、俺はこの名前をずっと前から知っていたような気がした。

朝起きてふと思った。その夜はよく眠れたと。

たまに郷愁感に襲われ眠れなくなることがあった。それが今日のように何か自分の中で大きなイベントがあるとき大抵起るのだ。

しかし、そんな日の前日の夜に何も起こらなかったというのはいい兆しだと思った。

学校へ行く準備を済ませ俺はいろんな思いを胸に学校へと向かった。

学校につくとお互い意識しあっているのか神崎と目が合った。神崎は何か言いたげな顔をしていたが、すぐに顔をこちらからそらし読みかけていた本へと視線を戻した。俺も目なんて合っていないかった、と何も声をかけずに自分の席へと向かった。

「で、あるからして……」

一限、二限と時は過ぎ、ついに放課後となった。

「はいじゃあ、授業終わり。起立礼無しで。各自早く自分の部活に行くよ」

授業が終わるとすぐに神崎と目が合った。俺は席を立ち神崎のところへ行った。

「人が捌け次第この教室で話しましょうか」

「分かった」

俺は自分の席に戻り、机の上にそのまま置いてあった数学のノートをおもむろに読み始めた。もちろん内容が頭に入ってくることはなく、心ここにあらずに教室が空くまでの時間を過ごした。

「……記憶を取り戻したってことなのかしら」

無音になった教室の口火を切ったのは神崎だった。

じっとこちらを見て聞いてきた。その表情はあまりにも真剣で怖さすらあった。

俺はその真剣さに答えるようにしっかりと答えた。

「いや違う。むしろ教えて欲しいんだ。俺の過去に何があったかを」

それを言つと神崎は少し驚いた素振りを見せた。

「……確かに知ってる。でも、何で私が関係しているって分かったの？」

「……いやまあ、俺も確かな証拠があったわけじゃないんだ。ただ、知ってるとは思っただけど、俺ってさ昔のこと思い出すと胸が痛くなるんだよ。それで、前帰り道ちょっと先のマンションで会ったことがあっただろ。そんな時か

に発作が起きたんだよ。場所とかを考えてもそこだけじゃ判断できなかったんだけど……って、大丈夫か？」

それを言った時点でだいぶ神崎の顔が泣き出しそうになっていた。

止めようかと思ったが、続けてと言われたのでそうすることにした。

「陸上競技大会の時俺倒れただろ。その原因、って言った言葉が悪いかもしれないけど、神崎が飛んでるのを見た時だったんだ」

だから昔俺たちどこかで会ったことあったんじゃないか、そう聞こうと神崎のほうを見ると頬に涙が流れていた。

「違うの……」

神崎は涙ながらにぼつりと言った。

「違うって……」

「それはあなたの脳が勝手に間違えてるだけ……それはそれでなんかうれしい気もするけど……」

神崎は俺から視線を外し遠いまだ明るい空にちらりと目を向けた。その微笑にまたやはりちくり胸が痛む。そしてすぐに顔を戻し、頬に掛かった涙を振り払い、潤んだ眼差しのまましゃべりだした。

「あなたのその懐かしさを感じているのは私の面影じゃない。私の姉よ」

「あ、姉？」

突拍子もないことを聞き混乱する。

「小学校入る前まで私の家族はこの白金地区に住んでいたの。それで住んでいたのが、あのマンション」

思い出そうとするのを体が拒絶しているのか、薄っすらと頭痛がしてきた。

「そして、あなたと同じ幼稚園で仲が良かったのが私の姉というわけなの」

頭痛と共に幼稚園の頃の記憶が段々とよみがえってきた。

内気な自分はまだ俺の友達を作れず大抵一人でいたこと。

そんなとき決まって同じ誰かが俺のそばにきて一緒に遊んでくれたこと。

砂遊びや設置してある遊具で遊んだり、他の人を誘って鬼ごっこをしたこと。

走って転んで泣いた時、額を当てて慰めてくれたこと。でもその人の顔が思い出せないままだった……

「あなたたちはとても仲がよくて幼稚園が終わった後もよく遊んでいたらしいわ」

「その場所っていうのがつまり……」

「あのマンションの下の公園や開けているあの場所」

「ここまでくればそつだということはあらかじめ予想がつく。」

「ここから先は……」

俺を心配するように神崎がこちらを見てくる。

そう聞いた瞬間、なるほど、と理解するとともに激しい

頭痛がまたもや襲ってきた。

俺は何故記憶喪失になんかになったのか。

ここまで思い出した俺の記憶は微笑ましい、よくある小

さい頃の記憶というものだ。記憶喪失になり得る所以は見

当たらない。

ここからがその理由。俺の知りたかった真実。

そう思うと恐怖と緊張で身がしまるのを感じた。

でも、

「大丈夫。聞きたい」

俺は声を大にしてそう言った。

それを聞いた神崎はうんとうなずき、分かった。と、ぽつりと行って話し始めた。

「姉がいつものようにあなたとキャッチボールをしていたとき、姉の投げたボールが風で大きくなってしまったらしいの……」

ぱっとその情景が俺の脳に飛び込んできた。

キャッチボールをしているさなか、かぶっていた帽子が飛びそうなほどの風が吹いた。

もう投げてしまっていたボールはその風に流されるままに飛んでいく。

俺が取りに行こうとするのをその子が止める。

運悪くそのボールは道路へと転がり……

「そのボールを姉が取りに行ったとき、たまたま通りかかったトラックに……」

ドスン、キキッ、キャー！　おい大丈夫か！？　誰か早く救急車！

脳裏にかけられていたロックが外れ、すべてを思い出したことを悟った。

俺は喚きもせず、呆然自失よろしくただその場にへたり込み涙を流していた。

今と昔とが交差した俺は、昔の俺が憑依したかのようにぼつりと言葉がこぼれた。

「俺があの時取りに行っていれば……ごめん……」

ごめん。複数の意味をはらみながら俺は何度もそう呟いた。それ聞くと神崎が俺のことを力強く抱きしめてきた。

「自分を責めないで！ あなたは何も悪くない！ もちろんこんなのは誰が悪いとかじゃない……」

俺たちはしばらくそのままでした。

俺は、その時守れなかったその人のために、それでもなお自分を守るためにその過去を取り去ったという事に猛烈な謝罪をし続け、

神崎はそんな俺を慰め許し続けた。

傍から見たら訳の分からない構図であるに違いないだろう。でも、俺たちにとってこれがお互いのできる最善手であつたのだらうと思う。

しばらく経ち、俺は落ち着きを取り戻した。

「ありがとう。もう大丈夫」

俺は神崎の腕を解き立ち上がった。

「そんなことがあつたんだな……」

俺はぼつりとそう呟いた。

「ええ。私も親から聞いた話だから、若干違つかもしれないけど……」

神崎も涙を手で拭いながらしみじみと答えた。

俺はガラス越しに見える快晴の青空に目をやり、大切な人だつたんだなっと思うその人の事に思いをはせてみた。

いつも無邪気に笑ってかけて行く。

俺がその後を追う。

楽しかったであろう輝いた日々。

それでもその人を完全には思い出せない。

女の子だろつとは思うが、顔だけがぼやけて見えない。

そんな折ふと疑問が俺の中に舞い込んできた。

俺は涙を振り払い聞いてみた。

「そついえば神崎の姉の名前ってなんていうんだ？」

神崎も涙を袖でぬぐいこちらをみて答えた。

「真奈美。神崎真奈美よ」

そう言つと神崎は姉を見るかのように視線を空へと向けた。

「真奈美……？ ……本当にか？」

「ええ」

その言葉を聞いた瞬間、心臓がドクンと止まるかと思うほど跳ねたのを感じた。

聞き覚えがあるどころの騒ぎではない。俺はその名をつい昨日聞いたばかりであった。

そんなことはあり得ない。だって今死んだってことを聞いて、納得したばかりではないか。

でもそう聞いた瞬間俺の過去の映像にいた人物がああのマンションの子に重なった。

そう思った瞬間俺は居てもたつてもいられなくなつてしまった。

「どうしたの？」

突然の驚きぶりにまた具合が悪くなったのではと神崎が心配そうにこちらを見てくる。

「だ、大丈夫。でも行かなきゃいけないところを思い出し

たんだ」

焦りに身を任せてしゃべってしまった、失礼だったかなと思つたが神崎の顔はあたたかかった。

「記憶に関することなんでしょ？ 行ったほうがいいわ。

私は大丈夫だから」

そう言つてにっこりと笑つた。

「すまない。それじゃあ」

神崎に一礼して教室からでて、俺は駆け足で自転車置き場まで走つた。

「そんなことあるわけ……」

俺は自転車にまたがり猛スピードであのマンションへと向かった。

「はーっ。はーっ……いない……？」

ついでみていつものところをくまなく探してみたが、あの少女は見つからなかった。

悲しみでとつともない胸の苦しみが襲ってきた。

そんなときわきの方から、

「あ、お兄さん今日は遅かったねー」

なんて声がしていつものようにこちらにやってきました。

「お、おう。昨日の件、片づけてませ」

安堵と緊張と運動で心拍数はいまだ上がりっぱなしであった。

そして俺はまじまじとその少女を見た。

どこからどう見ても普通の女の子だった。俺の記憶の中の神崎真奈美とよく似ているだけの、このマンションに住んでいる、同じ名前を持ったあの少女。それだけだと心に言いつけた。

「あー。あれか。大丈夫だった？」

「なんとかな。おまじないのおかげかもな」

笑いが何とも痛々しくなってしまう。

「それならよかった」

にこやかにこちらを見る。

その笑顔に應えるように俺も笑顔で語りかけた。

「じゃあ今日は何する？ 砂遊びか？ かくれんぼか？」

そういうと少女は、うん。と首を振り、俺の少し前を

歩き振り返ってこう言ってきた。

「今日はさ……未来の話をしない？」

「未来の話？」

「そう。未来の話。昨日準備するからって早く帰ったじゃん。

それぞれ」

「そういうばそうだったな。で、何なの未来の話って」

将来何になりたいとか、俺の夢は何なのか、そんな話をするものだと思っていたがそんな感じではなかった。

「もし、さ……」

歩きながら少女はうつむいた。

「もし私が大きくなったらさ……」

そういうと少女はまた少し前を歩き、うつむいた顔を上げ、屈託のない満面な笑みを浮かべ、一回転して見せた。

「こんな感じになるかな！」

すると、小さかった背丈は俺とほとんど変わらないぐらになり、服まで変わっていた。着ていた服は俺の高校のものだった。顔もすっきり大人になって、でも小さかった時のあどけなさは残ったまで……簡単に言えば綺麗だった。あまりにその光景は異質であるのにすんなりと受け入れられた。右目からは一筋の涙が流れ落ちて止まらなかった。

「ああ。すっごく似合っているよ。まなちゃん……！」

「えへへ、ありがとう」

ポニーテールで結っていた髪がふわりと揺れた。

「おっと、もうこんな時間かー。帰らなきゃなー」

少女、いや真奈美はそう俺に言ってきた。

もう会えなくなると俺は心のどこかで分かっていた。

もっと見ていたい、話したい、遊びたい。

声にならない感情があふれて止まらない。

「ま、まって……!」

そうとうと振り返りまた笑顔で言ってきた。

「はいはい。お兄さん。……いや涼ちゃん」

「大きくなったね涼ちゃん……!」

その後その少女こと神崎真奈美はあのマンションに現れることはなかった。

「あのさ……話があるんだ……」

俺はすべてを知ったということをお世話になった人たちに言っただけで済んだ。

両親はすべてを知ったことを聞いて泣いていた。俺のた

めだと思い、言わなかったらしい。

そしてこのことを神崎の両親にもはなしたら、そちらも泣いていた。

あらかた落ち着き真奈美のお墓参りをした。両方の親子で。

「行ってきます」

靴を履き、玄関を出て、階段の踊り場で青のマンションを目に入れる。

「……」

もちろんほとんど痛みなどないにしろ、すべてが分かったからと言って狭心が治ったわけではなかった。でもそれは単に俺の心臓が弱いだけで郷愁感がそうさせていると俺は思っている。

未来の話をしよう、彼女はそういった。しよう、つまり俺もしなければならぬ。俺はずっと過去ばかりを気にして生きてきた。だからこれからは未来を、前を向いていこうと思う。

俺が最後に交わした彼女との約束だから。

「よし！」

俺は自転車に乗り駆け出した。